

環境を考える経済人の会 21 2006 年度第 2 回朝食会

「森の生活 ～アフアンの森～」

C.W.ニコル氏（作家） 2006.6.9

三橋規宏 皆さん、おはようございます。今日はニコル氏にお話をさせていただくということで、お忙しい中おいでいただきました。

昨年（2005 年）9 月に山形放送で、環境のシンポジウムがあった時にニコル氏と同席しました。そこで、黒姫を拠点として荒れた日本の森の再生に取り組んでおられる話を、ユーモアたっぷりにニコル氏流の語りでお話していただいて、非常に感銘を受けました。本当は 1 月初めにこの会でやりたいと思ったのですが、海外にお出かけになっていたというようなことで、今回お願いする運びになりました。

ご承知のように、ニコル氏の職業は作家です。と同時に、いろいろな極地の調査などもやっておられます。今、食事をしていて驚いたのですが、ニコル氏は朝食をとりません。ずっと昔、カナダのイヌイトと呼ばれる先住民の人たちと生活をした際、彼らは朝食をとらないということで、お付き合いしているうちに自然と 1 日 2 食の生活に慣れ、現在もされているということです。そのようなことでライフスタイルのお話も聞いて面白かったのですが、これからニコル氏の日本の森の荒れ具合と、その再生に対していろいろなことをおやりになっているので、そのようなことも交えてお話していただければと思います。それではよろしくお願い致します。

ウェールズ人の私がなぜ日本の森を守るのか

C.W.ニコル おはようございます。朝食の件ですが、朝食は食べたほうが良いと思います。私は 18 歳の時に 2 度目の北極探検でイヌイトのシャーマン（Shaman）と一緒に何ヵ月か暮らしたことがあります。彼らの厳しい訓練の中で、「お腹がいっぱいになった人が獵に出掛けると、動物には失礼だ。動物を殺す、命を取る理由は、腹が減っているからという以外にない」と教えられました。私は若くて大食いでした。ですから、お腹がすいたままカヤックで出掛けて、アザラシを探して獲るのは苦しかったものです。私の一番大好きな食べ物はフライドエッグにトーストで、よだれが出るくらい的大好物です。しかし、食べると 1 時間以内に眠くなってしまうので、今日の朝食も抜いたままにさせてもらうことを許してください。

私は日本で森をつくっています。外国人である私がなぜこのようなことをしているのか、不思議だと思います。その動機は、私が生まれた南ウェールズの自然が、英国の産業革命以来ひどく荒らされて破壊されていたことです。ローマ帝国時代の記録によると、ウェールズは約 90%が森でした。特に落葉樹の森でした。それからずっと隣国と戦争

をしてきましたし、いろいろな理由で森は破壊されました。例えば 201 年前（1805 年）に、英国のネルソン提督がナポレオン率いるフランスとスペインの連合艦隊と戦ったトラファルガーの海戦がありました。その戦いの結果、ヨーロッパを支配したナポレオンの軍も、海を渡っての英国支配は出来ませんでした。しかし、そのような大きなことがあると、どこかで犠牲を払わなければいけないのです。その犠牲は森でした。

もちろん人間の命もそうですが、その当時、英国の軍艦一隻をつくるために 150～300 年のオークの木が 2,000 本伐られました。そして、ニレ、マツ、クリ、クルミなどいろいろな木が 700 本程度伐られました。ですから、約 30ha の古い森は犠牲になります。船体をつくるだけのためにです。しかしその当時は、例えば鉄をつくるために炭を使っていました。大きな軍艦であるビクトリア号をつくるために、どのくらいの炭を使ったのか。このビクトリア号には大砲 100 基を載せたのですが、これは 1815 年にウェリントン（Arthur Wellesley, 1st Duke of Wellington : 1769-1852）という将軍が、ナポレオンの陸軍と戦ったワーテルローの戦いの時の大砲の数よりもずっと多いのです。英国が強くなるために、森が破壊されたのです。

私の時代になると、燃料は石炭に切り替わっていました。しかし燃料が石炭になっても、船は木から鉄になっても、やはり森は伐られます。石炭鉱の屋根を抑えるのは木でした。鉄道で石炭を運ぶのは枕木、特に硬い木、落葉樹の木々です。

そして、何だかんだと私が生まれた時に森はありませんでした。ウェールズは面積の 5%だけが森でした。その 5%はどうして残されたか。それは貴族や大金持ちの猟場のために残していました。ですから、本当の原生林を私は見ていません。

私はウェールズ人です。今はウェールズ系日本人です。私は学校に行った時に非常にいじめられました。5 歳までは英語を話していなかったからです。学校に行ってから、われわれの古い言葉を使うと殴られたり、先生に侮辱されたり、クラスから追い出されたりしましたので、小さい時からイングランドは好きではありません。ウェールズ人、アイルランド人、スコットランド人を探ればそれは出てきます。

今はいいのです。昨年女王陛下から勲章をもらったので許してあげます。しかし、そのような感情があるのです。

ロンドンに行くと、ロンドン是世界一すごい町だと教えられて、バッキンガム宮殿でいろいろなことを見て、ものすごい町だけれども、中心を流れるテムズ川は臭くて死んでいました。私は、小さい時から人間が荒らしていない自然にあこがれました。そして、私の家族もやはり第一次世界大戦と第二次世界大戦では犠牲を払っているので、私は戦争嫌いです。戦争をつくる組織は好めません。しかしいじめられていましたから、強くなるために 21 歳から柔道をやっています。ですから格闘技が好き、自然が好きです。

空手を習いに来日したことが日本の森との出会い

17 歳から北極に行きました。最初はカナダの北極探検で 8 ヶ月間、また 18 歳で北極

に 8 ヶ月間滞在しました。そして、20 歳では越冬隊に選ばれて 19 ヶ月間北極に滞在しました。私は、「北極地方は戦争をしたことがない。絶対、自然と共に暮らすイヌイットとずっといる」と思っていました。しかし、3 回目の探検の後でやりたいことがもう一つ出来ました。それは空手でした。柔道をやりながら日本の武道のことをいろいろと聞きました。そして、あるアメリカ人の M.P から「柔道の技よりすごいがある。空手は敵を一発で倒せる」と聞きました。ちょうど私が 16 歳の時に「LIFE」という雑誌に空手の特集が出ていました。その時に「すごい」と思いました。私は非常に単純な人間です。北極の 3 回目の探検の後で空手をやると決めました。

しかし、英国には先生がいません。ではどこに行けばいいのか。もちろん、本場は沖縄と知っていました。しかし、その時には沖縄はアメリカに支配されていました。私はアメリカに支配されている沖縄には行きたくない。では、あとはどこか。沖縄の素晴らしい先生が大正時代に東京に来て空手を教えていると聞いて、ならば東京がいい。非常に単純です。そして私は、44 年前に日本に来て空手を習い始めました。

その時には日本のことはほとんど知りませんでした。神風と、人力車と、家は全部木と紙で出来ているとか、富士山程度の知識でした。日本語は簡単なものは知っていましたが、「段取り」「技あり」「一本」「始め」「出足払い」などという柔道用語しか知りませんでした。日本に来るということは、17 歳から 22 歳までほとんど大自然の中にいた若者が大都会に来るということで、非常に大変でした。そこで、私の空手の先生が先輩たちに「こいつを山に連れて行け」と言って、44 年前に初めて私は日本の森と出会ったのです。

日本の山の小さな村、そしてイワナなどが泳ぐ自然の美しい川を知りました。クマがいるということで、「うそだろう。動物園から逃げたんだろう」と最初は思いました。しかし、そうではなく、ずっと日本にはクマがいます。クマを獲る専門家の「マタギ」もいると先輩たちから聞いて驚きました。英国からクマが絶滅したのは 900 年以上前です。私はケルト人ですので、ケルトの歴史には小さい時から憧れていました。ケルト人の大好物はイノシシ。昔は大きな鍋でイノシシをぐつぐつ煮て、そして誰が一番おいしい肉を取るかという殺し合いまであったという話が多くありました。しかし、日本に来るまでイノシシは食べていません。なぜかという、400 年以上前に、森と共にイノシシは消えました。私は日本に来るまで天然のサケ、マス、イワナを普通の人食べられると思っていなかった。北極ですと、北極イワナがある。しかし、それは工場などがないからイワナがいる。イワナや、サケやマスは、貴族や大金持ちしか食べられないと思っていました。特に、日本の田舎に行くと、普通の人イワナなどを食べることが出来る。

日本の森に残るステンドグラスよりも美しい木漏れ日の風景

44 年前の日本の人口は英国の倍でした。それほど大きい国ではないのに長野県、群

馬県、山梨県に行くと、7 割以上が森。クマがいる森。美しい川にサケが上がったり、イワナがいる。「どうして？」と思いました。なぜこのように自然を残すことが出来たのか。日本のブナの原生林を初めて歩いた時、ちょうど 6 月の終わりで東京は暑くて、おそらく長野の飯山だったと思いますが、先輩たちと一緒に上野から出発しました。朝着いて歩き出しました。山に上がって、だんだんと景色が変わって、そのうちにブナの原生林に入りました。どこからも涼しい風が来ました。空気がおいしいし、どこからでも流れる水の音がする。小鳥の鳴き声、素晴らしい木々を見ると、大聖堂にいるような気分になりました。上を見ると若葉から通ってくる太陽の光はどんなステンドグラスの窓よりも美しいと思いました。「昔のヨーロッパ人は、森を真似して大きな教会（大聖堂）をつくったんだな。なぜこの日本は、この美しい風景を、ケルトの風景を残してくれたか」心の中は喜びと怒りを感じました。英国は偉そうに大英帝国と言っても、これだけ自然を破壊した。ますます英国を捨てようと思いました。日本を非常に尊敬しました。

もちろん、私は新聞を読んでいたもので、大都会の周りの汚染のことは知っていました。しかし、東京から 1 時間列車に乗ればクマがいる森がありました。私は空手の黒帯になるまで 2 年半かかりました。その間は、日本と日本人と納豆、お酒、刺身、北極ではわさびと醤油なしの刺身に慣れていたので、醤油とわさびがあると北極の刺身も倍くらいおいしくなるとわかりました。ですから、日本びいきでした。空手を通して多くの友達が出来ました。

エチオピア初の国立公園をつくるための密猟者との戦い

しかし、いろいろな運命があって、27 歳の時に、7 回目の北極探検の後でエチオピアのハイレ・セラシエ皇帝にリクルートされました。エチオピアの北部にある山の国立公園、現在は世界遺産に入っているシミエン（Simien National Park）の最初の公園長を務めました。その時には、国立公園をつくるのが夢でした。人間がお金を出してすごい建物をつくって、ガードマンを雇って人間がつくった芸術を保護することはもちろん良いことだと思いました。しかし、神様がつくった、あるいは神を信じないならば長い時間がつくった自然の美しいものを保護するべきだと私は思っていました。そしてアフリカでは、国立公園が彼らの文化や経済のためになっていると信じていました。例えば、マサイマラ国立保護区や、そのようなケニアの国立公園に、マサイ族の生き方は動物と共に保護されている。たくさんの外国のお金は、ケニアや当時のタンザニアやウガンダに、国立公園を通して入る。エチオピアにも素晴らしい文化がある。エチオピアはイタリアが数年攻めて以来、アフリカの独立国です。ヨーロッパよりも早くクリスチャンになった文明国です。そして、美しい自然、ものすごい景色があるので、国立公園をつくることは非常に良いことだ。私はハイレ・セラシエ皇帝に雇われたことは名誉だと思っていました。

ただし、山の中には山賊がたくさんいて、密猟者がたくさんいる。最初の 1 年は国立公園をつくるためにまず環境アセスメントをしなければなりません。どのような動物がいるか。そして、人間アセスメント。どのような村があるか、宗教は何か、人口はどの程度か、家畜はどのくらいか、鉄砲は何丁か。そして、地図を描くこと。どのようなエリアが国立公園になるべきか。そして、治安です。20 名のエチオピアのレンジャーと、タンザニアのレンジャー学校を卒業した優秀なエチオピア人と一緒に 22 人で、1 年で 203 人の悪者を退治しました。そして、治安が良くなると、男たちは武器を持たないで道具を持つことが出来るようになります。人が市場に行く時に、山の美しい、森の美しいところがありました。そこはハチミツが有名でした。エチオピアの飲み物で一番憧れているものはハチミツ酒でした。ですから、ハチミツを市場に持って行く。そして織物。きれいな織物がありました。それまでは、市場に行くために男たちは鉄砲を背負って、ロバ、ラマ、馬と一緒に歩いていなければ危なかったのです。しかし、われわれが 1 年戦った後で、男 1 人と奥さんと子供が安全に市場に行けるようになりました。お金をもらってあるいは塩をもらって、また村に帰っても安全でしたので、われわれはみんなのためにも国立公園のためになっているのだと思っていました。

しかし、村の学校がない、病院がない、警察がない、子供たちはあまり良い栄養がないので、6 歳になるまでに 6 割の子供たちは死んでいました。私はそれを見て、この経済はどうか良くなるかといろいろと苦しみました。しかし最後は、私が深く信じていたことは、われわれは森を守っているから、高い山の森を守っているから、森から流れていく水は国立公園の周りの村も生かしている。ですから、動物を守ることも当然、珍しい植物を守るのは当然だ。そのようなものを、観光客はお金を出して見に来る。しかし、何よりも水源地を守っているということは正しいと信じて、自分の部下にいつも話していました。われわれは神様の仕事をしている。私の部下には、クリスチャンも、イスラムも両方いました。神様は飲み水をわれわれに贈っているから、それを守ること。

しかし、エチオピアの経済も政治もだんだん悪くなって、最後にはゲリラが入ります。ゴリラならいいのですが、ゲリラは厄介です。私は 3 ヶ月頑張りました。向こうは自動銃を持っています。昨日ザルカウィという悪者は殺されました。彼が持っていた銃と同じものをゲリラは持っています。われわれはおんぼろのボルト式のイギリスの鉄砲しかない。しかし、われわれは地元を知っていました。地元の人たちはわれわれを信じていました。ですから、頑張ればどうにかなると思ったのですが、ゲリラはモラルがないので誰でも殺す。恐ろしいものです。私を暗殺しようとしてきました。最後にいろいろな友達が、「ニコル、お前は絶対に殺される」と言いました。あの時、私は自分の仕事を信じていました。しかし、子供が 3 人いました。私たちが頑張っても歴史は変えられないとわかったのです。30 歳になった私は家族を選ぶか、自分のエゴで戦い続けるか。それで私は日本に帰りました。

日本人の自然との付き合い、文化を小説に

日本は天国に見えました。山が青々として、山の水はきれいでした。エチオピアは慢性的な水不足です。そして山を破壊して森を破壊して、侵食で土がなくなってしまって、8 ヶ月の乾季のせいで青々とした、水がたっぷりの国が砂漠になる。日本人は、こんなことはしない。言論の自由のある日本。宗教の自由がある日本。どこを歩いても飛び道具を持たなくてもいい、治安の良い日本。そして、第二次世界大戦の後からずっと「平和」という約束を守った日本。本当に天国に見えました。

私は日本が好きなのです。エチオピアに 2 年いた時の心の傷。負け犬の私はまただんだんと自信がつかしました。エチオピアでは仕方がなかった。カナダの仕事をして、いろいろな環境を保護する仕事をして、私の心はいつも日本に引っ張られていました。ちょうど 1978 年頃に、捕鯨のことで日本バッシングが激しくありました。私は日本の捕鯨船に乗っていました。日本のクジラ捕りが好きでした。そして、日本の捕鯨は人間の食べ物のため。そのために、危険な海で大きな獲物を獲ることに挑む男たちを尊敬していました。捕鯨のことは議論してもいい。今の日本は鯨肉を食べなくてもいいという議論はいいです。議論しましょう。日本の捕鯨は日本の文化の一部だと私は思っていましたし、クジラを 1 頭捕れば、何百の牛は食べなくてもいいという議論をしよう。しかし、北アメリカやヨーロッパでは捕鯨のことは議論になりません。とにかく感情論になっていました。

では、私には何が出来るのか。私は真実を書けばいい。しかし、真実をそのまま読みたくない人々もいる。では小説にすればどうか。歴史小説を書けば、人々が理解してくれるのではないかと単純に思い、カナダ政府の仕事を捨てて日本に帰って、捕鯨の歴史の小説を書くために和歌山の太地町に住み着きました。その 1 年後南極に行きました。南極でどれほどクジラが多いか。私も知っていると思っていました、8 時間で 900 近い数のクジラを自分の目で見てビックリしました。

それで私は捕鯨船に乗ってずっと考えました。当時私は 40 歳でした。私は日本に住みたい。日本のことが大好きだ。私が一番苦しい時、日本が私を助けてくれました。これから私は、「日本と日本人の自然との付き合い、その文化を書いてみせる」と思いました。

どこに住むかということを決めるのが大変でした。北海道は大好きで、そこにはヒグマもいますし、アイヌの文化は非常に尊敬していますが、冬は寒い。北極探検に 15 回行ってわかったことは、私は雪が嫌いということです。九州もいい。九州の男たちは男らしいし、焼酎も大好きだ。沖縄も大好きだ。東北もいい。東北の言葉は英語に近いし、人がすごく良い。しかし、谷川雁（詩人：1923-1995）という私の友人は黒姫に住みました。それで私は 26 年前に黒姫に住み着きました。ナウマンゾウを獲るという 3 万年前の文化のあるところ。戸隠には忍者もいましたし、山にはクマがいますし、きれいな川がありますし、山々はみんな独立してでんと構えている。広い、明るい高原の景

色のある黒姫。私は恵まれた男だ。これから私は、他の外人には書けないものを書いてみせると思いました。

安い外材を輸入し国内の森を放置して日本の自然は貧弱に

しかし、その頃から毎日のように大型トラックが大木を積んでどんどん林道を下りていました。私は、山を知るために猟友会に入りました。猟友会の仲間と山を歩いてみると、どれほどの原生林が伐られているかがわかりました。クマが棲めない山をつくっているのは、日本の林野庁です。急斜面の原生林を伐採して、そこにスギを植えているのは日本の国です。侵食が起こって鉄砲水が起こると、イワナがいた川にコンクリートを貼るのは日本政府です。私は、「ちょっと待ってよ。これは日本のやり方じゃない。これ間違っている。ちょっと考えて」と言いたいのです。周りの山を見ると、原生林は大きな大木、何百年も経った大木、ずっと生き残った大木と、いろいろな動物、植物、昆虫、小さな苗木、多様性豊かな原生林は日本の森全体の 2% 以下です。あとは里山と人工林です。最初に日本に来た時の里山はきちんと人間が入って手入れをしていました。明るい林でした。子供や年寄りがよく入っていた林。キノコや山菜がたくさん生えていた林。しかし、26 年頃の日本のバブルの時に、そのような林は放置されて、全く光が入らない藪になっていました。また、植えっぱなしのスギはどうなるか。

スギやヒノキやカラマツを、最初は密集して植えることは正しいやり方です。真っ直ぐな木が育つならば、太陽に向かって上へ上へ行こうという植え方は正しいのです。ただ、途中で光が入らなくなると木の成長は止まります。そして、下の枝はみんな死んでしまいます。その時に枝下ろしをして間伐をします。つまり、キャベツや大根と同じように取らなければいけないのです。しかし、それをしない。里山を放置して、植えっぱなしの森を放置して貧弱な自然しか残らない、あのバブルの始まりの日本の経済が間違っていると思いました。日本の皆さんはよく働いていたので、どんどん円が強くなって外国の材木をどんどん買っていました。カナダの原住民も非常に悩んでいました。彼らの原生林も伐られていました。フィリピンも、インドネシアも、マレーシアも伐られていました。賄賂を受けた役人はいいのですが、原住民が森を破壊されていることに困っていました。しかし、経済優先で売るほうが悪い。われわれは買えばいい。そして、日本の材木は安いので、森にお金を掛ける価値がない。そのような日本は、私は嫌いだ。一生懸命愚痴を言いましたが、聞き入れられませんでした。それは当然です。もし、皆さん日本人がウェールズに行って、ウェールズの自然や経済のことで愚痴を言っても嫌われるでしょうから。

南ウェールズのボタ山にウェールズ人が小さな日本の森をつくる

私は嫌われました。友達も出来ました。私の心を変えたのは、南ウェールズで数十年前から恐ろしい事故の後の森を復活する活動があったからです。その恐ろしい事故と

いうのは、炭鉱をつくる時に醜い石（ボタ）も出ます。今の学生はこの言葉を失っています。「ボタ山」という言葉は通じません。しかし、そのボタ山（炭鉱から出た、いらぬ石）が大雨のために地滑りをおこしました。真下には小学校がありました。昼間でした。子供たちも先生方も全員死にました。それまでも、山の鉄砲水や水害が非常にたくさんありました。エネルギーのもとが石炭から石油に切り替えたことは良いことだと思うのですが、炭鉱で働いていた人たちは仕事を失ってしまった南ウェールズ。ひどい時は失業率 37%でした。

その国が、貧乏な南ウェールズが、森づくりをやっていると聞きました。なぜ私はそれを知ったかという、南ウェールズの政府が私に「ウェールズの気候では、日本の木々は何が育つのですか？」と聞いてきました。なぜ日本の木を植えたいのか。これは日本の企業が南ウェールズにたくさん工場をつくってくれたからです。そして、南ウェールズの人たちに仕事を与えたのです。ロンドンではなく、日本の企業です。多い時には 1 万人程度の日本人がウェールズに住んで、マネジメントや技術をウェールズに教えていました。ケルト人の考えでは、自分の国から離れると独特の寂しさがあります。英語にはそのような言葉はないのですが、ケルト語で「ヒーロイ」と言います。それを治すことは、自分の国の歌や自然を見れば少し安らぎになる。ですから、日本人のために日本の木々の小さな森をつくらうということを南ウェールズが言っていました。しかし、その小さな森をつくらうという場所の選定は、私には理解出来ませんでした。なぜかという、私の思い出では雨がよく降る砂漠だったからです。ボタだらけで、47 の炭鉱の後の破壊。木がない。川が死んでいる。そして、炭鉱をつぶしてから仕事がないので、その地域からどんどん人が出て行く。

「えっ、そこに森？」ボタの上に森はつくれないと思いましたが、ウェールズに帰ってみると、ボタの上に森をつくっていました。まず、斜面の形を変えて、肥料を撒いて、草の種を撒いて、かすかに緑が出てくれば、緑は緑を呼ぶ。そして、地元の人がバケツ一杯の土を谷間から持って行って、山に行つて手で苗木を植えていました。それを見て目から鱗が落ちました。私は日本が大好き。私は作家です。しかし、いろいろな経験があるので、もう愚痴は止めようと思いました。私が儲けたお金を放置された森に使おう。森の復活を私の手でやろう。小さくていいから美しい小さな森を残せば、日本人はわかってくれる。言うよりもやる。それは日本人によく言われた言葉でした。私のウェールズのおじいさんにも言われた言葉でした。ですから、21 年前から荒れた森を買い始めて、森の回復に挑んだのです。それはなぜでしょう。有名になるためではありません。私個人は有名になりたいことはありません。私は非常に人見知りです。人がいないところに住むのが一番楽です。しかし、私は日本が好き。私はお返しをしたい。自然が好き。その森を残せば納得するかな。では、森は自然に任せればいいといういろいろな考えがあります。

手入れすれば花が咲き、昆虫が来て、鳥が来る森に

最近、本当に腹が立ったことがありました。200 人の財務省の若い役人に講演をしました。感情を入れて、日本経済を本当に復活させるために、長いスパンで国民の健康、心の健康と日本の環境、森、水に予算を回したほうが良いということを一時間半話した後で、質問を促しても全く質問がないからです。それで私が怒ると、一人が「僕は、人が手を入れるより自然に任せたほうが良いと思う」と言いました。あの一瞬、100kg を超えた空手七段の力で一発だけ殴りたいと思いました。

日本では森を伐るとどうなるか。まず、笹がドンと出ます。笹の葉をどうして弁当に入れるか。殺菌の要素があるので、他の生物を抑えるからです。つまり、笹がいっぱい出ると、他のものは出ない。ただ、若い木々があると、特に落葉樹の木の下から芽が出ます。それは 30 年程度残すと、私の首くらいの太さになります。これは薪や炭、シイタケ、なめこ、ひらたけなどをつくるのにちょうどいい大きさなのです。しかし、手入れをしなければ、そのような切り株から出たものは成長が止まって腐り始める。

そして、日本には蔓が多いので、切り株から出たものに移りやすい。それでだんだん蔓が重くなります。特に雪国では雪の重さで蔓と枝が折れます。折れたところから病気になるか、また芽が出る。ますます藪になります。藪に巣をつくる鳥はいます。しかし、藪でエサを取る鳥はほとんどいません。藪はつぐみでも飛べません。大きな鳥、ネズミを取るフクロウなどはエサが取れない。そして、大木がなければシジュウカラなどの小さな鳥が巣をつくれません。「うろ」がなければ巣をつくること出来ないので。

では、そのような小さな鳥の役目は何か。もちろん生きる役目はあります。しかし、そのような小さな鳥はほとんど夏に 2 回子供をつくるのです。自分の体より大量の虫を毎日取ってくれます。子供がいる時はどのような虫を取るか。葉っぱの裏にいる葉っぱをよく食う毛虫です。そして、葉っぱが落ちて、子供が育ってからは、シジュウカラなどは木皮の中の昆虫を取ってくれるのです。

森を伐採して笹がドンと出て、いろいろな植物が出なくなる。切り株から貧弱なものが藪になると、いろいろな動物、いろいろな鳥が消えてしまう。では、大木になるのはどのくらいかかるか。おそらく 300 年程度ではないか。しかし、そのような森を手入れすればどうなるか。木はまた成長します。笹刈りをすればいろいろな花が出ます。花が出ると昆虫が来る。昆虫が増えると鳥が来る。シジュウカラやフクロウには巣箱を置けば棲めます。その巣箱が不自然だと言われると仕方がない。私は森の中でフクロウやカラ類、タカなどがいたほうが良い。人間の手で環境をつくれれば、そのうちに大木が出来る。そうすると巣箱など要らない。未来を信じて仕事をするのは正しいと思いました。言葉だけではいけないので、一緒に映像を見て下さい。音もありますが、この音は全く編集していません。そのままのわれわれの森の音です。

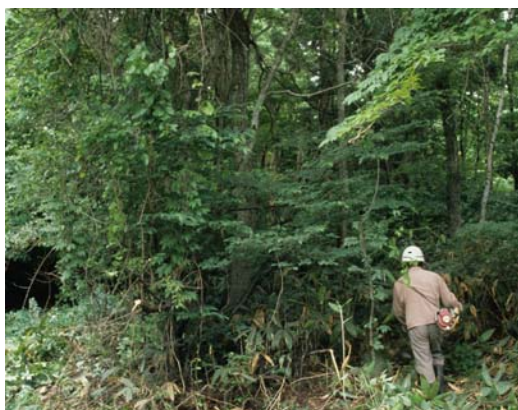
<映像>

風が通り光が入った森で、木はまた成長し始める

ニコル アファン (afan) は「風が通るところ」という意味です。



左は入り口。なるべく自然な色と自然なもので森をつくろうということでやっています。右は松木さんの仕事小屋です。21 年前はこのような感じでした。



これは松木さんが調査した後で、「この木はもう死んでいる。こういう木は伐りました」ということで、大量の木を伐りました。そして、昔どんなものがあつたのかということ、地面の中を調べて、それをまた植えました。しかし、藪との戦いは激しかったのです。もちろん、所々に笹も残っています。どれほど大変だったか。しかし光が入ると、木がまた成長し始める。若木がまた出るようになります。まだらに光を入れるほうがいいのです。

場所によって池を掘りました。その池は 2 年後に左のようになりました。池を掘ると、水を好む生物が増えます。そして、水はけが良くなる。この土地は畑をつくらうとしたところだったので、ブルドーザーを入れたり、いろいろなことで水の流れがおかしくなっていました。森は手入れをすると、生物が喜んで出てきます。

鳥たちがどんどん増えて、森がにぎやかになりました。以前、この森は「幽霊森」と言われていました。暗くて、怖い所。光を入れるとたくさん若木が出る。下左はタマゴダケです。これは甘味もあり匂いもあります。甘味のものほとんど猛毒ですが、これ

だけはおいしい。しかし、間違うと大変です。木の実も増えます。昆虫も増えます。約 700 の昆虫が発見されました。キノコの種類は三百以上発見しました。下右はフクロウの子供たちです。お母様ご苦労様。ネズミをものすごく取ってくれます。



↑タマゴダケ



↑フクロウ

森はだんだん健康になってくると美しい。どこを見ても、色と形がきれいです。これはヤマネです。冬がありますが、特に昨年の冬は雪が多く、雪下ろしが大変でした。これはウサギとキツネ、リス、テン。健康的な林や森は、一年中何か食べ物があります。



↑ヤマネ



↑キツネ



↑リス



↑テン

これは本当に荒地で、水が表面近いところで、われわれは大胆に川をつくり（下左）、土手をつくって溝を掘りました。480m の川です。水を引いたのではなく、つくりました。水の層を下ろして木がよく育つように、そして今ヤゴやオタマジャクシと、水を好む鳥たちが増えています。ここ（下右）はある一部ですが、どこにいても水の音が聞こえます。私はこのつくりにした時に、目の不自由な子供たちが喜ぶだろうと思いました。トンボは非常に増えました。トンボは蚊を取ってくれるので大好きです。もちろん、森は健康的になると、動物だけではなくおいしい食べ物も増えます。見て下さい。小さなカエルです。1 cm しかありません。単純にこのような考えで森をつくろうと思っていました。



4 年前に、私が買った土地を財団に寄付してから、少しずつトラスト運動で面積を増やしています。これを見て、「木を伐っているじゃないか」と思われるかもしれませんが。この木は伐らなければ枯れました。やはり、美しい森をただ残すだけではなく、森を生かす人間も恵をいただかなければいけない。そして、調査と教育。



左のクマは寝ています。右は巣箱です。この鳥はおんぼろ巣箱が大好きです。新しい

ものを入れても入りません。これはシジュウカラの巣箱です。ウェールズの森と姉妹森をつくった。この川は死んでいました。周りの山はボタ山でした。川には今サケが上がって、カワウソも戻りました。これは日本の森のコーナーです。カンジガーデンも入れて、現在日本人とウェールズ人の子供の交流が来ています。

作家のネタにもなります。このような本の印税は森の仕事に全部回しています。いろいろな施設、虐待を受けた子供たちや、目の不自由な子供たちを森に呼んでいます。森には癒しの力があるのです。このような写真は、われわれは出版出来ません。この子供たちはみんな虐待を受けたり、親に捨てられたり、親が自殺したなど、心に深く傷を負った子供たちです。しかし、そうしたいろいろな子供が、森に来ると自然に笑いが出るようになります。

健康的な森は教育の場であり、安らぎの場

日本の未来のために、なぜこのように「森」と言っているのか。最初、日本に来た時に講道館に 3 ヶ月住んでいました。そして、柔道の先輩に、「この蛇口の水飲めますか？」と聞きました。そうすると先輩は、「ばかやろう。日本の水はどこでも飲めるんだ」と言いました。さすがに駅にも飲み水がありました。ところが、最近はどうでしょうか。昨夜、このホテルでもミネラルウォーターを 3 本飲みました。1,000 円でした。どこに行ってもミネラルウォーターです。水が高くなった。長野県では、われわれが知っているだけでも、多くの産業廃棄物、医療廃棄物が不法投棄されています。水源となる地域でも捨てられている場所を 2,000 ヶ所は知っています。これは経済のためになるのでしょうか。不法投棄で捨てられたゴミ処分のためのお金は、透明ではありません。透明でないお金は、本当にたくさん流れています。これは武士道の国ではない。やはりこのようなゴミ処理も、そのためのお金も全部透明でなければいけません。水源地を汚してはいけません。

森の恵は水、空気です。しかし、他にもいっぱいあります。ハチミツ、炭、薪、バイオマス、山菜、キノコ、薬。健康的な森は、教育の場に本当に良いところです。安らぎの場所にも本当に良いです。これだけ雨がある。独立している日本は、経済の一部だけ森に回せば、森で働いている人にも回せば、少しずつ元気になると思います。

私の夢は、ゴルフ場と同じくらい「健康的な森づくり」が流行るといいということです。そして未来にはサケ、アユ、イワナが川に戻ってくれる。私の子供の時に知っていたウェールズの三つの川は死んでいました。しかし、今はマスもイワナもサケも産卵している。カワウソも最近戻りました。ロンドンのテムズ川にもサケが上がっています。ロンドンの郊外までカワウソが帰ってきました。もし、北九州から北海道までサケがまた川に上がったりとすると、森は健康になると、美しい日本になる。

美しい日本になれば、私は絶対に治安は戻ると思います。44 年前の日本の治安は素晴らしいものがありました。治安も戻ると信じています。年寄りや子供が近くの林で遊

んだり、散歩をしたり、山菜取りをしたら、本当に良い国になる。美しい日本ならば、隣の国の人に来て日本人と一緒に歩いて、おいしいものを食べて、おいしい水を蛇口から飲んで、「いやあ、日本は良い国だな。この自然を残してくれた人々は良い人だな」と言うでしょう。私はそうでした。

22 歳の時に、あの恐ろしい戦争が終わって、たった 16 年です。英国では日本のイメージは非常に悪かったのです。ほとんどの人は、日本人は残酷で捕虜の扱いはひどい。そのようないやな経験がたくさんありました。私は闘うために日本に来たのです。格闘技のためです。私は日本の自然と日本の文化に憧れていませんでした。私は日本に来て、日本の自然、その自然がつくった日本人と日本の文化が大好きになったのです。

私と松木さんが木を植えます。その木が大木になるのを、われわれは見ることはできません。しかし、想像は出来ます。そのうちにこの苗木が大きな木になって、1 年で一斗缶のハチミツが取れる。われわれは見なくても、未来を信じることが出来る。人間は、道具をつくる、火を使う動物と言われています。私はそれよりも、想像が出来る。良い国を想像してその方向に少しずついけば、絶対に成功すると思います。

地球温暖化のいやな話をいっぱい聞きます。われわれはそれと面と向かって戦わなければならないのです。なぜならば、ミズナラという木がどんどん枯れています。今までは森にいなかった昆虫が増えています。その昆虫がミズナラの中に穴を掘って、カビを持ってきます。それでミズナラが死ぬ。しかし、われわれの小さな森だけでも 70 種類の木がある。可能性がある。日本の自然には対応性があるから可能性がある。生き残る可能性があるのです。それを利用しよう。説教をするつもりはありませんが、私は本当に信じています。私は日本国籍を 11 年前にいただきました。私は亡命したのではありません。私は日本が好きだから、日本人になりました。一緒に皆さん森づくりをやってくれとは言っていない。しかし、意識して下さい。人間が荒らした自然は、人間の力と愛情と汗で治すことも出来る。良い日本をつくりましょう。

三橋 どうもありがとうございました。森づくりに取り組んでこられたニコルさんの思いが、皆さんそれぞれに伝わったのではないかと思います。

最初に私のほうから質問が一つあるのですが、最近、シカやサルが、天敵がいなくなったために、どんどん増えて森を荒らしているという話を聞くのですが、これは今ニコルさんが管理されている森でも同じような現象が起こってきているのでしょうか。

ニコル サルは近くまでは来ていますが、まだ入っていません。クマは入っています。われわれの森のクマたちは、分析すると安定元素です。トウモロコシや人間がつくった穀物のカーボンと森の中のカーボンは違うのです。われわれの森で食べ物を取っている

クマたちは、畑に害は及ぼしていません。一昨日、京都の貴船で 40 人のために鹿料理を出しました。猟友会が有害駆除で取っているシカを、われわれがつくった「もったいない倶楽部」でいろいろな料理（中華料理、日本料理、西洋料理）で出しました。みんな口をそろえて「おいしい、おいしい」と言っていました。ニホンシカのメス 1 頭で 50 人の食べ物が出せます。おいしいです。オスはいま一つ。エゾシカなら 60 人分くらいです。私の財布は鹿皮です。印伝の芸術が素晴らしいと思います。ですから、「鹿は自然の恵みだと思って獲って」と言っています。

サルは困ります。食べたくありません。しかし、エチオピアでヒヒの被害があった時に、人家に出るヒヒを撃ちました。それで出てこないようにしました。サルはどうすればいいのか。テレビカメラや、保護団体がなければ私は解決出来ます。悪さをするサルは殺してしまいます。そして、見せしめにします。健康的な山に行くと、エサがあるからいいではないか。これは問題です。しかし、シカはおいしい。イノシシは今 1 頭が 8～30 万円程度します。なのに捨てている。私はイノシシを毎年物々交換か車代などで、買っています。私の冷凍庫には 1 年に 3～4 頭のシカと、2～3 頭のイノシシが入りません。私はお客様に自然の肉のほうがいいと思って出しています。

苗木を植えたところで、シカが入らないようにするために殺そうとは思っていません。きちんとしたフェンスをつくらなければいけないだけです。しかしそのために、やはり国からも援助をしてほしいと思います。

三橋 確かに変な動物愛護で増えすぎた野生動物が、かえって自然を荒らしてしまうというようなことに対する対策はなかなか難しいのですが、ある程度割り切ってやる必要があるような気がします。

土屋忠巳 ニコルさんのお話で、多様性という言葉がありました。今シカの話がありましたので、先日見たお話をします。当社も法人の森という制度で国有林を 4.3ha を借りて、3 年間で 4 万 5,000 本程度植えるということをしています。5 月 28 日に宮脇昭先生（横浜国立大学名誉教授）に習って、22 種類のいろいろな木を植えて「鎮守の森」と言いますか、メンテナンスの不要な森をつくるということをやっています。

下見に行った時に、いろいろな木が植えてあるのですが、シカに食べられている木がたくさんありました。しかし、食べられていない木もあります。ですから、食害とも戦いながら、対応しながら自然を残すという意味があるのではないかと思います。

ニコル もう一つは、自分ではやっていないので話しませんでした。チェコでは苗木

にスプレーを掛けるのです。白っぽいもので、味、歯ごたえはシカが好まない。苗木には害がありませんし、毒ではありません。そのスプレーのやり方を私はもう少し勉強したいと思います。スコットランドやニュージーランドでは、2m40cm の高くて頑丈なフェンスをつくったりします。あとは間引くしかないでしょう。しかし、シカは苗木が大好きなのです。3年程度の若木、ちょうど大人の腰くらいの高さに、春においしい葉っぱが出ると、ちょうどいい高さなのでシカは食べます。

土屋 一昨年植えたくらいの、今おっしゃるような木が鋭い歯で食べられていました。

ニコル ウサギは芽よりも皮を食べます。2m の高さの木の枝が丸坊主になってしまいます。お客様が来ると、「黒姫のウサギは木登りが出来るのですか」と聞きます。つまり、冬場に積もった雪の高さあたりの木皮が被害に遭っている。雪から出ているか、雪で折れているものはウサギが皮を全部食べます。しかし、ウサギ1羽で8人分のご馳走が出せるので、今年の秋を楽しみにしています。

津田寛 ケルト人と伺いましたが、最近の日本で自殺者が3万人などということが何年も続いています。英国にもそのようなかなり複雑な人種があるのかもしれませんが、そのような観点から、今の日本のそのような状況をどのように組み立てられるのか。そのようなことで何か感じられることがあればご意見を伺いたいと思います。

ニコル 私も知っています。若い日本人、友達の娘が21歳で自殺しました。なぜかわかりません。そして、北極のイヌイットは自殺率世界一です。友達の15歳の息子も自殺しました。なぜ私たちが止められなかったのか。私も恥ずかしいのですが、四十いくつで何回も深酒を飲んで散弾銃を持ち出すくらいまでいきました。憂鬱になりました。しかし、この森づくりを始めてから、そのようなことをする暇はありません。われわれの周りに公園、森など、もっときれいなところがあれば、本当に少し助けになるのではないのでしょうか。

ウェールズの5%だけの森の地域は、今は60%になっています。その手伝いをしてきた人たちが、他の人と比べて非常に元気で健康です。森の中で、われわれも調査はしています。森の中で散歩をして深呼吸をすると免疫力が必ず良くなりますし、血圧が安定しますし、ストレスが減ります。ただの理想かもしれませんが、その人たちが自然に少し返せばいいと思います。But I don't know I have to do it. この部屋の中にいたいと思う

けれども、非常に憂鬱になって暗くなっている人の顔が読みにくい。特に、日本の役人や大学生などに一生懸命話をしても無表情です。ですから、I don't know I have to do it. しかし、もし自然の中に返せれば、少し気分が良くなるのではないかと。Do you have any ideas?

松下和夫 最後のスライドで、障害のある子供たちに環境教育をやっているスライドがありましたが、あれはどのようにやっておられて、どの程度定期的に受け入れておられるのか。あるいはどのようなプログラムでやっておられるのか、ご説明いただけますでしょうか。

森田いづみ（サンオフィス：ニコル氏事務所） 一年に 80 名程度です。回数は視覚障害の子供たちは 2 回、養護施設の子供たちは 3 回です。養護施設の子供たちと書いてありますが、基本的には精神的、肉体的に虐待を受けた子供たちです。2泊3日ですが、その間にいろいろなプログラムを行っています。基本的に、五感を使うプログラムです。子供たちが森の中に入るということはもちろん気持ちも良くなります。そして、日常生活とは全く違う環境の中にあるということは、大人との関係が非常に良くなります。要するに、森の中に入ると肉体労働が非常に多くあります。そして、自然との接触が多くあります。また皆と、同じものを見る。同じものを感じる。そして、大人たちが自然の中で頼りになります。要するに、動くことが全て自然です。ですから、非常に人間関係のコミュニケーション能力と言いますか、都会にいる不自然さではなく、非常に良かったちの人間関係が出来るということと、自然の持つ効果。「フィットンチット」などと言いますが、いろいろな物質を木が出しています。あれは非常に精神的な安定を促す効果があります。私たちも病院の先生たちと血液などを採って検査をしているのですが、森の中に入ると気持ちの中の閉じていたものが開いてくるという感じがものすごくして、子供たちはとても元気になります。

ニコル 森はこのプログラムで、どの程度までなら人間が入っても受け入れてくれるか。これを見定めるのが私の役目です。森に入る人間を増やして、人間のアクティビティでクマが来れなくなるとか、鳥が巣をつくれなくなるとか、珍しい植物が踏まれるようであれば、制限をします。私にとっては、森は第一、人間は第二。しかし、この 2 年の経験では、結構入っても、あるルールを守れば動物は逃げないことがわかりました。

私は直接教えていません。私は中に入って黙って座って見ていると、子供がみんな集まってきます。それで、私は語り部をやったり、棒を振り回しているガキどもには、「お

い、ちょっと待って。棒術を教えようか。棒術はまず礼儀で始まる。棒をこうやって持って『お願いします』とお辞儀をするんだ」というように、棒術の技を教えたりします。他のインストラクターは専門家です。

三橋 ニコルさん、どうもありがとうございました。また、これが終わった後、ニコルさんのオフィスの窓口になっている森田いづみさんと名刺を交換しておいて下さい。あとは、ニコルさんの森を、例えばわれわれの仲間の有志が見てみたいということは可能ですか。

ニコル もちろんです。

三橋 また、場合によっては事務局から計画してもらおうと思います。是非、見てみたい感じがしました。今日は本当にありがとうございました。